

Safewing cath

セーフウイングキャス

患者さんに対する
安全対策はもちろん、
器材コスト削減も実現

中国電力株式会社
中電病院



使用目的に応じた使い分けを明確にすることで 安全性・作業効率・コスト面の課題をクリア

2011年エピネット日本版サーベイによると、針刺切創の発生状況は「製品使用中」が26.9%で最も多く、更に、留置針の針刺切創の41.6%が安全装置付き器具を用いても発生していることが報告されています¹⁾。広島市の中心部にあり、予防医学から急性期医療、そして回復期リハビリテーション医療をシームレスに提供し、地域医療の中核を担っている中電病院でも、長年針刺切創件数の削減が課題となっていました。2012年の件数は前年に比べ半数に減少。外来点滴の中核を担う中央採血室においては2008年2月に開設以来、針刺切創0を継続しています。

安全性の向上を実現させ、かつ厳しいコスト要求もクリアした器材選定・活用を実践されている感染対策室、中央採血室の皆様にご話を伺いました。

1) エピネット日本版サーベイ 2011 (JES2011) 結果報告書 <http://jrigoicp.umin.ac.jp/jes/jes2011/JES2011doc4.pdf>

事故発生防止には物理的に針刺切創が 起こらない(フェール・セーフ)ことが重要

「実は2008年から2010年頃まで、安全装置付きの製品を採用しているにも拘わらず、針刺切創は年々増加していました」と語るのは感染対策室の木村さん。

「留置針や翼状針の安全対策は色々あると思いますが、決まり事を怠ったり、適切な操作を誤ったりすると針刺切創が発生します。やはり人間がすることですので、物理的に針刺切創を防止できるフェール・セーフが製品機能として重要だと思います」と感染対策チーム委員長である麻酔科医師の西岡先生はおっしゃいます。

「中電病院とJMSは御近所ですから、セーフウイングキャス(以下SWC)も比較的早い段階で紹介があり、フェール・セーフ製品と感じました。でも、実際に使用する人たちの意見が重要ですので、感染対策室の木村さんを介して現場の看護師に紹介し、評価してもらいました」と語る西岡先生の推奨もあり、木村さんを中心にSWC導入の検討が重ねられました。

熟練したスタッフのいる部署に評価を限定、 コストも考慮した使用ルールが確立

「SWCは、ある程度症例が確保でき、またスタッフの経験やスキルも高い部署でなら、的確に評価できるだろう」という西岡先生の考えにより、病院で最も穿刺する機会の多い中央採血室で実施することに。

「針刺切創防止のフェール・セーフはもちろんですが、SWCを見たときに他にもすぐに活用できる症例がイメージできました」と感染対策チームのメンバーである中央採血室の鶴井さんは語ります。

「人間ドックを受ける患者さんのなかには、1日で採血⇒胃カメラの鎮静⇒PETセンターでのFDG注射と3回の血管穿刺を受ける場合がありますが、SWCなら1回の穿刺で済み患者さんの負担を軽減できます。また、留置針の場合は延長チューブを付けますが、SWCは最初からチューブが付いており、接続の手間が少なくなるし、コストダウンになります」。

このように、SWCの採用を後押ししたのは、安全面だけでなく、作業効率・コスト面でのメリット。近年では現場においても作業効率だけでなく、コストに対する意識が強く求められますが、一



ICT 委員長
麻酔科部長

西岡先生

中央採血室での3つの留置針の使い分け

■SWCを使用する場合

- ・点滴漏れのリスクがある方(長時間の点滴がある方、移動や体動が考えられるような方)
- ・500mL以上の点滴でトイレに行くことが想定される場合
- ・高齢の方

■翼状針を使用する場合

- ・若い方で動かない場合、点滴でも100～200mLの場合

■留置針を使用する場合

- ・入院する患者さんなど長期の留置が必要な方
- ・側管から他の薬を入れる可能性がある方



一般的な留置針と比べて、チューブ付きのSWCはトータルで考えるとコスト安。

「留置針とSWCどちらでもよいなと思ったら、SWCを選ぶよね。」コストを下げるためには、看護技術を上げること、適切な器材の選択が大切だと教育しています」と外来主任の山本さんはおっしゃいます。

中央採血室では現在、翼状針、留置針、SWCを採用していますが、それぞれの特性を理解・納得した上で、適正なデバイスを選定することで、コスト削減と安全・効率性向上を実現しています。

「針を多く扱う部署であることから、患者さんの安全はもちろん、自身の安全を守るという意識が重要」と述べる中央採血室の川住さん。更にそれを受けて「その手技は危ない」等、先輩・後輩の垣根を越えて、お互いに言い合える環境が醸成されてきたことが大きい」と鶴井さんは指摘します。

「誰でもそうだと思いますが、製品だけを渡されて“これ使ってみて”ではなかなかイメージが掴めません。この症例にえばこういうメリットがあるから…ときちんと説明でき、その上で経験者が“こうやって使う”と示すことが重要です。中央採血室は注射の好きな人、得意な人が多い。怖がらずやってみようという人が多かったのもよかったです。適応を理解し、教えられるリーダーをつくっていくことも大切」と山本さん。

また、長年現場を離れて復職したスタッフのなかには、留置針の穿刺に抵抗感を持つ方もいますが、SWCであれば、翼状針のイメージで、血液曝露の不安なく穿刺でき患者さんにも安心を提供できるようになるそうです。



外来診療部門 看護師
川住さん

外来診療部門 看護師
鶴井さん

具体的な適応を教え、実践することで、より安全な手技を確立、浸透

これまで中央採血室では針刺切創に対するKYT（K=危険、Y=予知、T=トレーニング）活動はもちろん、針の装着から廃棄まで標準化された手技の徹底を行ってきたとのこと。

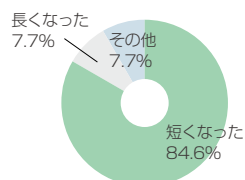
外来診療部門
主任

山本さん

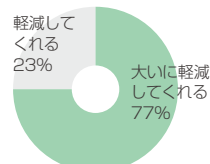


中電病院スタッフアンケート結果 (N=13)

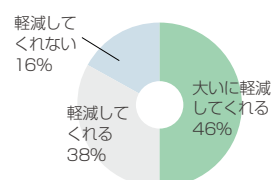
Q1 準備から固定（留置終了）までの時間は？（既存品との比較）



Q2 セーフウィングキャスは血液曝露の不安を軽減してくれますか



Q3 セーフウィングキャスは針刺切創の不安を軽減してくれますか



器材の新規採用で重要なのは、 「現場の声」と「コスト」の訴求

最近の医療施設では、新規製品を導入する際には、経営層や委員会が、コスト面や効能効果を吟味した上での決定が一般的となっています。今回 SWC は、これらの吟味をどのようにクリアしてきたのでしょうか。

「確かに、コストも重要ですが、基本は安全性の向上と使用する皆さんの意見」と話す西岡先生。「今回、外来がよい評価くれたので安全性を含めその後押しをするかたちで病院側に提案しました。使い慣れないという意見も一部ではありましたが、時間の問題（経験回数）と捉えていました」と木村さん。病院側から強く要望されたコストについても、使う目的を明確にし、SWC を翼状針ではなく、留置針の代替として活用することで、延長チューブが不要となり、コストセーブを実現。

「製品に対する理解を現場に求め、現場から要望してもらうのが採用への近道。針刺切創から感染などが起きれば多大な費用が発生しますし、他のデバイスとの使い分け方を明確にし、コストシミュレーションして提案すれば、経営側も納得しやすく、今回はトントンと進んだように思います」と木村さんはおっしゃいます。

感染対策室
感染管理認定看護師

木村さん



中央採血室以外にも SWCの適応を拡大していくために

しかし、「周術期、特に術中管理に使用するには、カテーテルの太さ、長さ等のバリエーションが物足りない。混注口が付くだけでも、更に手術室や病棟での適応は広がる」と西岡先生はSWCの改良の余地も指摘します。

また、「まだ理解されていないSWCの適応は他の診療科においてもあるはず。私は内科担当に変更になったので、今、内科や小児科でSWCがどのような症例に適応するのか検討中です。適応を決めておくことも重要です」と、山本さんはおっしゃいます。

今後普及のためには、教えられるスタッフを増やすこと。そしてSWCを活用するメリットをきちんと理解してもらうことが不可欠。更に、新人研修にも組み込み、誰もが迷わず使えるようにするための具体的な適応を示すなど、安全対策上の次の一手を検討されているようです。

私たちJMSも、皆様の意見を真摯に受け止め、“ニーズを形に”できるよう努めて参ります。

中国電力株式会社

中電病院

Chuden Hospital.

The Chugoku Electric Power Co.



- 開設 / 1949年5月
- 所在地 / 広島市中区大手町3丁目4-27
- 病床数 / 248床
- 診療科目 / 内科、小児科、外科、整形外科、産婦人科、皮膚科、泌尿器科、眼科、耳鼻咽喉科、麻酔科、歯科、放射線科、リハビリテーション科、PET・検診センター



<http://www.jms.co>

製造販売元
株式会社 ジェイ・エム・エス

お問い合わせ先
東京本社 第一営業部 TEL (03) 6404-0601
〒140-0013 東京都品川区南大井1丁目13番5号 新南大井ビル

2014.01.05XA164-DS